再考「石川三碧コレクション」（報告）

木本 文平

当館は、2014年（平成26）に九重味淋第28代当主の故石川八郎右衛門氏（1934～2020）から同家に伝来した美術品103点のご寄贈を頂いた。この作品群は主に同家25代当主の石川三碧氏（1844～1923）が収集したもので、なかでも寄贈作品中26点を数える冨岡鉄斎（1836～1924）の作品が注目されたのであった。一般的に鉄斎の作品については真贋が問われるケースが多いが、三碧氏と鉄斎は明治17年以前から親交があったとされており、作品も三碧氏が生前中に直接鉄斎から譲り受けたものであり、同コレクションの鉄斎作品は確かなものであった。このなかには晩年の代表作と目される《福禄壽図》や《瀛洲仙境図》の作品も含まれており、本館の代表的な収蔵作品となっている。

また、同コレクションには鉄斎作品のみならず文人画や南画系の代表的な作家や書家の作品も含まれていたが、収蔵時点ではそれらの作品についての真贋の判断が困難であったため＜伝・・＞という形で対応した。とはいえ私自身は近世絵画を専門とする者ではないが、それらの作品から受けるイメージはいずれも品格があり絵の持つ力が感じられた。そのこともあり、館蔵品となってからも粛々と調査をすすめてきた。その結果、近年においては、伝藤原定家《明月記断簡》が真筆であることが判明（詳細については藤原重雄氏執筆の本館『研究紀要No.5』所収「定家記録切」を参照されたし）、新聞紙上においても夕刊のトップをかざるニュース（中日新聞2018年9月14日付け）として大きく取り上げられ話題となった。また、室町時代の絵巻《てこくま物語》（1566年）も現在東京国立博物館所蔵となっているものの親本と思われるもので、歴史資料価値の高いものと評価された。さらに、令和3年に入ってから近世の文人画の巨匠・浦上玉堂の二幅の作品についても真筆の判断が下された。

この二幅の玉堂作品は、《山水図》（紙本淡彩墨画　縦25.3×横24.6㎝軸装）と《渓村夜雨図》（紙本墨画縦　143.3×60.7㎝軸装）であるが、とくに私自身が当館に収蔵されて以来気にかかっていた作品が《山水図》であった。この作品には、かつて愛知県美術館で見た繊細な描線による独特な空間が構成されている浦上玉堂の《山紅於染図》（木村定三コレクション・重要文化財）作品と極めて近い印象を受けており、何とか確証を得たいものと考えていた。そこで浦上玉堂研究の第一人者である守安 收氏（現岡山県立美術館長）に調査を依頼したのであったが、依頼当初の段階では口頭でのお願いであったこともあり、同氏に実証していただく機会に恵まれなかった。とはいえ近年、当館の展示計画の関係から確証を取りたい事情ができ、館としてもこの作品の再調査に取り掛かった。

先ず取り掛かったのが、三碧氏は、いつどこでこの玉堂作品を入手したのかの調査であった。この時、調査の重要な手がかりとなったのが愛知県史編纂室作成による『近世史料目録』「石川家（九重味淋）文書」であった。この文書には商家であったため江戸時代からの帳簿類や様々な覚書類などが主であったが、

書状類のなかには作品購入時の領収書などが含まれていた。そのなかに前述の玉堂作品が京都の熊谷鳩居堂から入手したことが明らかとなる領収書があり、九重味淋さんの了解のもとに現物資料の写真記録を取らせて頂いた。そして、それらの資料と作品画像データを合わせて守安氏に送付したところ、守安氏からすぐさま「先ず間違いなく真筆であろう」との返事があった。そして、実際に作品を実見して頂いたところ「二点とも作風に違和感はなく、落款も間違いない。真作としてよいだろう」との所見であった。なお、《山水図》は40代後半で《渓村夜雨図》は50代前半の作品と判断できるとのことであった。

あらためて記述するまでもないが、作品の真贋の決め手は、先ずは署名や印譜を含む作品そのものであるが、所蔵先や入手先なども重要な要素のひとつである。こうしたことから石川三碧コレクションの形成を考えてみると、「石川三碧」「冨岡鉄斎」「山中信天翁」「熊谷鳩居堂」の四者の相関関係を調査・研究する必要が考えられるのである。

先ず石川三碧と山中信天翁との関係であるが、詳しくは当館学芸員の豆田誠路が本館の『研究紀要No.3』所収の「石川三碧コレクションの冨岡鉄斎作品」で発表しているので参照頂きたいが、両者は師弟関係にあった。三碧の正式名は石川八郎治で、三碧は1866年（慶応2）に信天翁に弟子入りし、その時に名付けられた号。ただし、『九重味淋220年史』によれば1905年（明治38）に家督を嗣子・吉次に譲ってからの隠居後は雅号の三碧を名乗っていたとのこと。

ここで山中信天翁について少し記述すれば、実名を献（まつる）と言い1822年（文政5）に三河国碧海郡棚尾村東浦（現碧南市）の豪農の家に生まれ、幕末の京都において板倉槐堂、江馬天江、藤本鉄石、松本奎堂、梁川星巌らの勤皇の志を持つ者たちと交わり、岩倉具視の知遇を得た。維新後の明治新政府においては、石巻県権知事や宮家の家令などの要職を務めるが、1873年（明治6）の52歳の時に全ての職を辞し、その後は文人としての悠々自適な生活を送ったことが知られている。一般の人名辞典などでは幕末明治文人として漢詩や書画をたしなみ、政治家としても活躍したと紹介されているが、画家として評価は余りなされていない。私の個人的な見解ではあるが、画家としても鉄斎の描法にかなり影響を与えたのではないかと思っている。とくに信天翁の躍動的で豪快な筆致は、鉄斎の40歳代以降の作品に見ることができ、彼らの相違点は鉄斎が類まれなカラーリストであるというところであろう。話が少し脱線するが、海外のマーケット情報に精通してみえる蓑豊氏（現兵庫県立美術館長）に信天翁についてお尋ねした時、「海外においても鉄斎のことはよく知られているが、信天翁の作品もたまにオークションに出品されることがあったが、その時は結構な値段で落札されている」とのことであった。

話を元に戻そう。信天翁と鉄斎の関係は、鉄斎のご子息などの証言から、鉄

斎に絵の道に進むことを助言したのが信天翁であり、その出会いが太田垣連月尼のところであったことが知られている。そして、交流が始まったのが1862年（文久2）以降とされている。それは鉄斎が洛北の聖護院村に私塾を開いたころで、翌年には信天翁も天誅組の乱の騒動から逃れるために洛北の修学院村に隠棲しており、同じエリア内での居住も親しく交流をもつ一つの要因であったかもしれない。また、この頃、信天翁は同じ洛北の岩倉村に幽棲していた岩倉具視との接触が始まったとされている。ともかく信天翁と鉄斎の親交が深まったのは明治時代に入ってからで、両者の共同による作品が制作されている。

では石川三碧と冨岡鉄斎との関係は、1884年（明治17）に鉄斎が新城の鈴木鎌次郎あてに出した書状に三碧のことが書かれており、それ以前から交流があったことが推測される。具体的な事実としては1889年（明治22）と95年（明治28）の二度にわたって石川三碧の屋敷に逗留していることが判明している。この石川家での逗留は、鉄斎の芸術をいち早く評価し論評した画家・正宗得三郎（1883 ～ 1962）の著書『冨岡鉄斎』（昭和17年発行）のなかでは、明治24年ころに伊賀上野に滞在していた鉄斎に、三碧が大浜の自邸へ来ることを勧めたとされている。しかし、年次については些か信憑性の欠ける点があるが、兄事した信天翁の郷里ということも相まって訪問を決めたのであろう。その後、三碧は亡くなるまで鉄斎との親密な交流を続け、鉄斎からは作品を直に受け取っていた。

ここで石川三碧コレクションの形成のキーパーソンと考えられるのが、前出の「熊谷鳩居堂」である。この熊谷鳩居堂は、歴史を遡ること源平時代、一ノ谷の合戦で平敦盛を打ち取った源氏の武将・熊谷直実がルーツにあたるとされている。直実はその後出家し法然の弟子となるが、その子孫は江戸時代に薬種商「鳩居堂」を創業し、やがて香商となり合わせて書画用文具の輸入なども扱う店となった。その幕末期の鳩居堂7代目当主の熊谷直孝は、勤皇派の商人として知られており、蓮月尼のところで信天翁や鉄斎などと交流を持っていた。明治時代に入っても、こうした関係から信天翁や鉄斎の作品を扱っていたようで、このことについては、正宗が著書『冨岡鉄斎』「大濱時代の鉄斎翁」のなかで、「明治22年あるいは28年ころの鉄斎作品の扱いは鳩居堂」と明記している。

さて、何故ここで「熊谷鳩居堂」を取り上げたのかといえば、先の藤原定家の《明月記断簡》や浦上玉堂作品の《山水図》《渓村夜雨図》の購入先が全て鳩居堂であることが『石川家（九重味淋）文書』に明記（代金領収書）されており、信天翁や鉄斎そして熊谷直孝の関係から考えられることは、石川三碧のコレクション形成にあたっては鉄斎の審美眼が大きく関わっていたのではないかという推測が成り立つ。そうした観点に立てば、現在《伝・・》表記となっている池大雅の《芭蕉翁図》や《高閣垂柳図》、さらに椿椿山の《野蔬図》や田能村竹田の《草に蜻蛉図》などの作品の評価見直しが必要とされる。また、鳩居堂ではないが竹内栖鳳の《皓鶴図》などの作品も再調査が必要と考えられる。

以上が昨今の石川三碧コレクションに関係する近況報告であるが、あらためて同コレクションが示す近世から近代における文人画の形成の重要さと、明治、大正における碧南の文化人の意識の高さを感じる次第である。そして、このコレクションのご寄贈を頂いた第27代当主であった故石川八郎右衛門氏の「碧南に新たな文化の城を築くために、当家のコレクションを美術館で活用して頂ければという思いです」と語られた熱い言葉が忘れられない。

（碧南市藤井達吉現代美術館長）